

一匁二三分迄ニ賣リタリ、其仕方ヲ見ルニ、片見世ニ豆腐作リ酒店ニテ田樂ヲヤク、豆腐一丁ヲ十四ニ切ル、甚ダ大キナリ、豆腐外ヘハ賣ラズ、手前ノ田樂計リナリ、ソノ比豆腐一丁ニテ廿八文ナリ、是モ元直段ニテ味噌モ人モ皆々外物ナリ、サレドモ酒ノ明クヲ肝要トスルユヘ、田樂ヲ大キク安クミセ、酒モ多クツギテ安ク賣ユヘ、當前ニハ荷商人中間小者馬士駕籠ノ者、船頭日傭乞食ノ類多クシテ、門前ニ賣物ヲ下シオキテ酒ヲノム、コレニヨツテ野菜等ヲ求メント思フ人ハ、皆此豊島屋ガ見世先ヘ行ケバ、望ノ物アルユヘ、自ラ見世先人立多キユヘ、往來ノ人モ立寄、内ノテイヲ見テ繁昌ナリト沙汰ス、後々ハ樽賣或ハ五升三升ノ通樽ニテ求ニ來ル、寛保ノ比ヨリハ、大名ノ御用酒ヲモ被仰付、旗本衆小役人中ノ寄合ニモ必ズ豊島屋ノ樽ナキコトナシ、夫ユヘ糰町、四ツ谷、青山、本郷邊、小石川、番町、小川町邊ノ屋敷ヨリ遠方ヲ苦ニモセズ、山ノ手向車力馬足ニテ積送ル所ノ酒屋ヨリハ、格別下直ニテシカモ酒ヨク、猶々評判ヲ得タリ、新堀新川ノ酒問屋ニテモ金廻リ惡敷問屋ハ、元直段ヲ引テモ豊島屋へ積送ルニ、何百駄ニテモカヘスコトナシ、問屋モ前金ヲ借リテ著船次第ニ酒ヲコスベキナド、約束シテ、借用スル問屋モアリ、夏ニ至テ十日廿日ナラデ持マジキ酒ヲバ、皆々直段格別ニ引下グ、豊島屋へ送ルニ、一兩日ノ内ニハ飲盡ス、是ヨリ段々繁昌ス、其後近隣ニ此通ノ酒屋出タレドモ、手ゼマクシテ豊島屋ニ不及、是酒醤油カケ直ナシ安賣ノ元祖ナリ、

〔名家略傳〕賣酒郎

賣酒郎は何れのところの人といふことをしらず、將その姓氏をも詳にせず、自稱して嗜々といへり、あるひは彦四郎と通稱す、年三十歳ばかりにして、京師白河の西街に僑居し、書畫および篆刻を善くし、常に傭書をもてその母を養ふといへども、生計いと乏しく、賑贍することあたはず、こゝに於て自嘆じておもへらく、文雅はすなはち孝養に礙りあり、我はもと酒家の子なり、され